



園だより

.....15. 11月号

あそびの渦が広がって

今、愛隣幼稚園の緑テラス（新園舎と古い園舎の間の広い通路）には、運動会の野外劇に登場した大きな蜘蛛が住んでいます。あの時にはびっくりしていた子どもたちも、ここに蜘蛛が現れた日には入れ代わり立ち代わりやって来ました。動いていないか恐る恐る確かめながら、静かに通り過ぎていく子もいましたが、ほとんどの子どもたちは興味津々。「生きてるの?」「本物?」「あ、目がある!」と距離を置いた観察から始まり、恐いものではなさそうだとわかると、近くにあったベンチを運びそこに上がって触り始めました。「ふわふわしてる!」「気持ちいいね。」「これ、女の子? 男の子?」「かわいい~!」「名前は?」・・・しばらくの間、蜘蛛の下は賑わっていました。現在はその熱狂も落ち着き、ひとみちゃん（蜘蛛の名前）は今日も当たり前のようにそこにいます。

『蜘蛛』がこんなふうに脚光を浴びるとは思いもよらないことでした。かつて、カナヘビの餌として注目されたことはありましたが、これほど『蜘蛛』そのものに幼稚園中の子どもたちが関心を寄せたことはなかったように思います。ここには蜘蛛の巣のある「ありくい公園」のあそびが大きく関わっています。このあそびが幼稚園中の仲間たちに周知され始めた頃、ばら組の虫研究所にも大きな蜘蛛がいました。こちらは本物でしたから、頃合いを見計らって逃げ出しました。逃走先のたんぼぼ組にばら組やそう組、先生たちも集まって大騒ぎで捕獲作戦を見守りました。この“大騒ぎ”の中身は“怖さ”ではなく“面白いことになった”とか“捕獲にあたった虫研究所への応援”とか“大きな蜘蛛そのものへの関心”などでしたので、現場の空気はいい意味で熱く、一体感がありました。蜘蛛が無事捕えられた時には歓声があがり、集まった皆が興奮気味の笑顔でした。

始まりは緑テラスにできた蜘蛛の巣があるありくい公園でした。そう組が始めた小さなあそびは、そこに張り巡らされた大きな蜘蛛の巣が、通る子どもの目に留まり注目されました。たんぼぼ組もばら組もそう組も、様々な形でこのあそびに関わり始めました。（気が付くとばら組の蝶の羽がこの蜘蛛の巣に引っ掛かっているということも）先生たちはもちろんのこと、ここを通過する大人たちもこれを面白がっていました。幼稚園中の子どもだけでなく大人も巻き込んで、小さなあそびの渦が次第に大きな渦へと変化していきました。そして運動会の野外劇。大きな蜘蛛の巣のあるありくい公園が幼稚園中のみんなのあそびを繋いでお話が出来上がり、それぞれがその主人公として登場しあそびの延長線上にある晴れ舞台を楽しみました。蜘蛛と蜘蛛の巣。日常の中ではあまり歓迎されない存在、いい注目をされることがないものをみんなでおもしろがったら、こんなことになっていました。10月の園だよりに、愛隣の運動会は子どもたちが皆、「仲間はいい」と感じる1日であってほしいと書きました。あそびへの関わり方は様々でしたが、蜘蛛の巣があるありくい公園で子どもたちはクラスを越えた仲間たちに出会い、「愛隣幼稚園中のみんなを仲間とを感じる」1日を過ごすことができました。あそびの渦の広がりの中で子どもたちは仲間と関わりながら、生き生きと主体的に活動し幼稚園生活の主人公になっていきます。子どもたちの自由なあそびを幼稚園生活の中心にする私たちの願いがここにあります。さて一方で、あそびの渦は縦方向にも伸びて、子どもたちの蜘蛛をはじめとする生き物への興味や関心もいつもより深くなっています。それで遠足も大変でした。芝生の原っぱに散らばっていた子どもたちの手には、あっという間に様々な生き物が捕えられていました。バッタ・カマキリ・コオロギ・カナヘビ・おびたしい数のアマガエル・アリジゴク。もちろん女の子たちの手にも・・・。もちろん、全てリリースしてきましたよ!